
サブマリン 8 7 6

山口多聞 P

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サブマリン876

【Nコード】

N8576S

【作者名】

山口多聞P

【あらすじ】

昭和38年、太平洋上に現われた謎のU結社の潜水艦を退治するため、海上自衛隊は多数の潜水艦と女性兵士を投入する。その中に、秋月涼率いるSS876号の姿があった。

大ヒット潜水艦漫画サブマリン707とアイドルマスターのコラボです。なお原作キャラが問答無用で死ぬので、読む際は御注意下さい。

p i x i v の方にも転載しております。

876号出撃！（前書き）

当作品はサブマリン707とアイドルマスターのコラボです。拙著「流浪の三千院家」と同じくコラボ作品のオリジナリティを引き出すため、登場人物が容赦なく死にます。

原作キャラが死ぬのは嫌だ！認められない！という方は、ただちに戻るをクリックして下さい！この点に関する抗議は一切受け付けません！

警告はしました。それでも良いと言う方はどうぞ。

876号出撃！

昭和38年。太平洋近海に現われた謎のU結社の潜水艦隊は、軍民問わず無差別襲撃を加え、多くの艦船を太平洋の海深く葬り去って行った。

そんな中で、そのU結社との戦闘の矢面に立たされた海上自衛隊は急遽潜水艦隊の拡大を決定。アメリカ海軍から中古のガトー級潜水艦の供与を受けると、それらに近代化改修を施した上で実戦配備した。

また不足する乗員には女性も含む、若き人間が続々と充てられていった。

その中で、天海春香三佐率いるSS765は、敵本拠地破壊や敵潜水艦の撃沈に活躍したが、戦闘によつて損傷しSS765は一時ドッグ入り。天海艦長も負傷し入院した。

しかしながら、本拠地を失いながらもU結社の潜水艦は太平洋上の各地に出没し、次々に艦船を襲撃して行く。このため、海上自衛隊は総力を挙げてこれらの撃滅を図った。

横須賀海上自衛隊潜水艦隊司令部

「秋月涼一等海尉参りました！」

先日艦長に就任したばかりの秋月涼は、司令官室に入るとピシッ

と敬礼した。

「御苦労」

潜水艦隊司令高木雄一郎海将補が答礼する。

「SS876艦長就任おめでとう。そして、横須賀に回航させればかりでなんだが、君の艦には早速出撃してもらおう」

「はい！」

「実戦経験がない君たちのことだ。色々と戸惑うだろうが、石川君の教育を受けた君たちならやり遂げてくれると信じている。と言っても、さすがにそれだけでは君たちも心許ないだろう。そこで、君たちにはSS875号と共同で作戦を遂行してもらおう」

「875号ですか？」

「そうだ。君たちの乗る876号の姉妹艦だ」

「そうですか。それで、その875号の艦長は誰ですか？」

「君も良く知っている人物で、すぐにここに来る筈だ」

まもなく、部屋の扉がノックされた。

「入りましたえ」

高木の呼びかけに応じ扉が開く。入ってきたのは1人の女性士官だった。

「失礼します。秋月律子三佐、ただいま出頭いたしました」

「律子姉ちゃん!？」

入ってきたのは涼の従姉弟である律子だった。

「久しぶりね涼」

「律子姉ちゃんは、765号の副長だったんじゃない？」

「今回新たに艦長を拝命したの。その最初の任務が、あんたの876号との共同作戦になったと言うわけ。頼りにしているわよ。何せあんたは秋月一族の最高傑作なんだから」

「こっちこそ、頼りにしているから」

「875号と876号の出撃は明日だ。2人ともよろしく頼むぞ！」

「はい!」

司令室を辞した2人は、艦がつながれている栈橋へと向かった。

「それにしても、まさか律子姉ちゃんと一緒に出撃するとは思わなかったよ」

「私も最初聞かされた時は驚いたわ。あんたの艦はルーキーばかり見ただけど?」

「うん。副長は夢・・・桜井二尉、航海長は水谷二尉、機関長は日高愛二尉、通信長は鈴木彩音二尉」

「一応訓練隊の成績優秀者で固めたわけね」

「姉ちゃんの方は？」

「こっちは副長が水瀬一尉、航海長が三浦一尉、通信長が双海亜美二尉よ」

「そっちは実戦経験者ばかりだね」

「けど、皆責任者を任されるのは初めてだから。緊張しているわ」

そこで律子は視線を港のほうへとやる。

「でもそんな乗員でも、今は1人でも戦力が欲しいのよ。Uの潜水艦は相変わらず活動が活発だし」

彼女の視線の先には、入港してくる駆逐艦の姿があった。戦闘を行ったのか、前部に2基ある砲塔の内1基がめちゃくちゃに損壊していた。

「オーストラリアの「バンデッタ」よ。昨日襲撃を受けたタンカー「コクテイル」の救援中に損傷したらしいわ。怪潜は沈んだらしいけど、「コクテイル」も沈没。双方の乗組員に死者も出たそうよ。気の毒に・・・早く怪潜を根絶やしにしないと犠牲が増えるばかりだわ」

「そっだね」

「涼、私達の任務は楽じゃないわ。覚悟しておくのね」

「もちろんだよ」

翌日、875号と876号は横須賀基地を出撃した。

「両舷強速前進！」

876号のセイルに立った涼が命令を下す。

「了解です艦長！！！！両舷強速前進！！！」

機関長の日高愛が声を張り上げる。伝声管越しにも関わらず、耳にジンジン響く。

「愛は相変わらずね」

涼の後に立つ副長の桜井夢子が、呆れ混じりの声を漏らす。

「まあまあ」

「あら？」

夢子が何かに気づいた。

「どうしたの？」

「875号が何か信号を出しているわ」

「え！？あ、本当だ」

876号と並走する律子の875号のセイル上で、チカチカと発光信号が発せられていた。

「ええと・・・リヨウコウカイノアンゼンライノル・・・タイヘイヨウデオチアウノヲタノシミニシテイル・・・だって。夢子ちゃん、返信するから信号機を」

「了解」

夢子から信号機を受け取ると、涼は早速返信した。

「コチラコソ・・・コウカイノアンゼンライノル・・・ツイシン・・・イオリサンタチニモヨロシク」

その信号を、律子と副長の水瀬伊織はしっかりと確認した。

「まったく、涼は本当に出来た男ね。さすがあんたの従姉弟」

「ちやかさないですよ。とにかく、信号はこれで終わり。水道を出るわ。針路左へ10度！潜航用意！」

「了解！針路左10度！潜航用意！」

一方876号でも。

「水道を抜けたね。針路右10度！潜航用意！」

「了解！針路右10度！潜航用意！」

「了解です艦長。潜航用意？」

航海長の絵理が独特の言い回しで命令を伝達する。

「針路そのまま！・・・潜航！！」

涼の命令と共に、タンクに水が入り876号は潜り始める。875号も潜航を開始し、潜りだす。徐々に2隻はその艦体を沈めていく。

「姉ちゃん、気をつけて」

「涼、がんばってね」

全没直前、2人は最後の敬礼を交わすとハッチから艦内へと入った。

出港して行く2隻を、765号の艦長天海春香二佐は病院の窓から見送った。

「律子、涼君。くれぐれも気をつけて」

その病室の扉がノックされる。

「春香、失礼するよ」

入ってきたのは765号の副長に就任した菊池真だった。

「真、律子に変わってあなたが副長ね」

「うん。よろしく頼むよ。艦の修理と補給はさっき完了したよ」

「わかったわ。律子と涼君が出撃したし、私たちもグズグズしてられない。真、明日には出撃するわよ」

春香の言葉に、真は目をひん剥かんばかりに驚く。

「は、春香！先生の話じゃあと1週間は休むべきだって」

「それは医者言葉よ。私の体は私がよくわかっているわ。誰が何と言おうと、明日には出撃するわ。皆にもそう言うておいて」

「・・・わかった」

潜航後、律子指揮する875号は針路を北へとり、一路日本列島沿いを北上した。律子は副長の水瀬伊織、航海長の三浦あずさと共に今後の針路を決定する。

「私達の任務はこのままオホーツク海まで出て、そこから今度は針路を変更してアリューシャン列島のアツ島近海をパトロールして南下。その後ミッドウェー近海で小笠原方面のパトロールを終えた

涼の876号、そして横須賀を出港した春香の765号と会合する。
これが今回の航海予定よ」

「わかったわ。オホーツクにアリユーション、また寒そうね。出撃前に防寒着を積み込んだのはこのためだったのね」

「随分遠いわね。迷子にならないように気をつけないと」

あずさがノホホンと言うが、伊織は不安を感じずにはいられなかった。

「大丈夫？この間の訓練で、北と南を真逆に走ったなんてことがあったけど」

「まあ今回は私たちもしっかりとサポートするし、何だかんだ言ってもいつも目的地にはちゃんと着いていたんだから大丈夫でしょ」

「だと良いけど。ま、こんな近海に敵はいないだろうし。のんびり行きましよう。それにしても、765号も合流するのね。春香は入院中だけど間に合うかしら？」

「春香ちゃんをよく転ぶけど、約束は守る娘よ。ちゃんと来るわよ」

「そうねえ。むしろ、やる気たっぷりあの娘なら病院を抜け出してでも来るかもしれないわね。涼の876号も、新人ばかりだけど皆優秀だから心配はいらないでしょうし」

「そうね、涼はああ見えてしっかり者だし」

「副長の夢子ちゃんも出来る娘だから、きっと大丈夫ね」

そんな感じで幹部陣にゆったりとした空気が流れる中、通信長の亜美が会話に加わった。

「定時通信終わったよー・・・3人とも何楽しそうに話してるの？亜美も混ぜてよ」

潜水艦とは思えない空気に包まれながら、875号は北へと向かって行った。

その先にある運命も知らずに。

翌日、875号は千島列島の択捉島沖に差し掛かった。そこで、異常事態に見舞われた。

「おや？・・・艦長外の様子が変です・・・ソナーの音波が乱れています！何かが艦の周りに纏わり付いているみたいです！」

ソナー手が悲鳴に近い声をあげる。

「何ですって？故障？」

「いきなり故障だなんてあり得ないわよ！聴音機はどうなの？」

伊織の言葉に、ソナー手は首を振る。

「ダメです！音波が混乱しています！」

「敵かしら？」

あずさが首を傾げる。

「怪しいわね。敵の妨害かもしれないわ。気をつけて」

律子の表情から余裕が消える。

「艦長ダメです。これではツンボと同じです」

ソナー手がまたも悲鳴のような声を上げる。

「仕方が無いわね。このままでは危険だわ。海面に出るわよ！浮上よ！タンクブロー！」

「浮上！タンクブロー！！」

伊織が復唱すると乗員がタンクの水を排水し、875号は浮上を開始した。

その頃、海上ではU結社の量産型潜水艦のU961が浮上してくる875号を待ち構えていた。

「あ！あそこに浮上するぞ美希！」

副長の我那覇響が指を指す。その途端、艦長の星井美希はしたり顔となった。

「思った通りなの。ソナーブラインドに驚いて浮上してきたの・・・貴音、モーター始動なの！敵が浮上したらロケット砲で仕留めるの！」

「了解です星井美希。モーター始動！ロケット水雷発射用意！」

艦内で待機している航海長の四条貴音が復唱する。量産型のU型はセイル後方にロケット砲を1基搭載している。この砲は水上目標相手に威力を発揮する。

「艦体が見えたら、一撃で仕留めてやるの！」

そしてソナーブラインドに炙り出された875号が海面に姿を現した。

「目標捕捉！方位80！距離2000！射角5！ロケット弾装填良し！連続発射可能！」

砲手が報告を上げる。

「撃てなの！」

バシユバシユ！！

ロケット弾が連続発射された。

876号出撃！（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

875号の最後（前書き）

ええ、題名にあるとおりです。

そして前話の前文どおり、今話からキャラがたくさん死にます。

やっぱりダメという人は、ただちに回れ右して撤退してください
！

875号の最後

「海面まで25m・・・20m・・・」

伊織が深度計を読み上げる。

（もうすぐ海面ね・・・待つて！ソナーと聴音機が使えなくなれば、誰だって怖くて潜ってなんかいられない・・・しまった！？）

「海面まで5m、もうすぐ艦体が海面に出るわ」

「ダメ！浮上止め！降下して！」

「え！？」

「律子ちゃん、どうしたの？」

あずさが怪訝な表情をする。

「もう海面に出てるわよ？」

「いいから、すぐに潜航して！タンク注水！潜舵下げ！急速潜航！」

「わかったわよ。急速潜航！」

それまでとは逆に、乗員たちは急いでタンクに水を入れ、海上に出掛かった875号は潜航を開始した。

一方、海面に浮上した875号の姿を捉えたU961では。

「撃てなの!!」

バシユバシユ!

ロケット砲による攻撃を開始していた。

「もう律子!何を考えているのよ!?上がったり下がったり!ただでさえこの艦は中古なのよ!?下手すればバラバラになるわよ!」

伊織は怒り心頭である。しかし、律子はそれを気にせず言い放つ。

「本当にバラバラになりたいの?」

「「はあ?」」

伊織とあずさがわけも分からず言った途端に、875号を連続して凄まじい衝撃が襲った。

「うわ!」

「キャ!」

伊織たちが悲鳴を上げる。

「こ、攻撃!」

「やっぱり、思ったとおり。こっちがソナーが使えなくなって浮上することを計算して狙っていたんだわ」

「律子ちゃんが潜航をかけなかったら、直撃していたわね」

「ごめん律子。さっきはあんなことを」

「いいのよ。とにかく、早めに潜航出来て良かったわ・・・けどこれで敵が近くににいるのがはつきりしたわね。急いで敵の位置を捉えなきゃ」

「ソナー、敵を捉えられないの？」

伊織の問いに、ソナー手は首を振った。

「ダメです。音波は引き続き混乱しています」

「ソナーも聴音機もダメじゃお手上げね」

「仕方が無いわ。潜望鏡深度まで浮上して」

「了解。潜望鏡深度まで浮上！」

「敵が見えなくなったな」

「むう、どうやら気づかれて潜航されちゃったみたいなの・・・こつちも潜航するの！響、中へ入って。急速潜航！」

「わかった。急速潜航！」

875号に続き、U961も潜航して海中へと姿を消す。

875号が潜望鏡とレーダーによる索敵を試みて浮上してきたのはそれから間もなくだった。潜望鏡とレーダーのみを海上に出して敵を探す。

「あら？」

律子は潜望鏡を一周させる。しかし、海上には敵の姿も影もなかった。

「どう？」

「ダメ、目視じゃ確認できない。潜望鏡を降ろして」

「レーダーも、何も捉えられないわ」

レーダーを確認したあずさが報告する。

「どうやら潜航しちゃったみたいね」

「どうするの？ソナーも聴音機もまだ回復していないわ」

「マズいなあ。すぐ近くに敵はいるはずなのに。このままじゃ、何時不意打ちを喰らうかわかったものじゃないわ」

「けど、相手も聴音機やレーダーが使えないなら、こっちの位置はわからないんじゃないかしら」

「そうよ、あずさの言うとおりよ。ここは大人しく待ちましょう」

「そつだと良いんだけど」

「なあ美希、大丈夫か？聴音機もソナーも使えないんだぞ？」

「それは敵も同じなの。多分敵のほうか余計に混乱しているの。それに、こっちは向こうが浮上した位置から、だいたいの位置は検討がついているの。あのまま針路を変えていなければ・・・」

「それ程遠くない位置にいるはずと言うことですね？」

「貴音の言うとおりなの。そしてこっちはとっておきの武器があるの。響、艦首のマグネリッドを発射して」

「わかったさ。艦首マグネリッド発射！」

U961の艦首からマグネリッドが発射される。この装置は先端に強力な磁石を内包した浮きがセットされており、目標の磁気を探知するとウキが敵の艦体に吸い付き、電気が流れる仕組みとなっている。

「どっつ？」

美希がリードを操作する兵士に訪ねる。

「現在上方にリードが伸びています」

リードを操作する兵士は慎重にリードの動きを追う。

「あ！？リードが右へ伸びます！」

「しめた！敵の磁力を感知したんだ！」

カチン！

「あら？」

「どうしたの伊織ちゃん？」

「いや、何かが当たったような音がしたような・・・」

「空耳じゃなくて？・・・もしかしたら、何かの罠かも。と言っても、ソナーも聴音機も未だダメじゃどうしようもないわ」

「あ！？アンペア・ゲージが上がります！」

「やった！敵を捉えたの。これで有線で敵の位置がわかるの・・・
具体的な位置はわかるかな？」

「はい！・・・右18度より接近中！・・・本艦の上方約25m付近にいます。距離は300mで、目の前です！」

「それは実に好都合なの。マウスキッドの一撃で、今度こそ仕留めてあげるの。貴音」

「わかっていきます艦長。マウスキッド発射用意！」

マウスキッドとは、U型の前部甲板に埋め込まれた小型ロケット弾発射機で、21基でワンセットとなっている。口径40mmのロケット弾を直上へと発射させることができ。主に艦艇に対して使われるが、場合によっては航空機に対しても使用できる。

これまでも爆雷攻撃を試みた駆逐艦やフリゲート、航空機やヘリコプターを多数屠ったU結社の誇る兵器であった。

「間もなく直上です！」

「マウスキッド発射！！」

「あ！？」

それまでソナーの探知不能で、黙っていたソナー手がいきなり声を上げた。

「どうしたの？」

「真下に敵です！」

「え！？」

「嘘！？」

「しまった回避！！」

律子が叫んだのと、875号の艦体を下から突き上げる凄まじいまでの衝撃が襲ったのは同時だった。

「キャア！」

「うわあ！」

律子は強かに壁に打ちつけられた。

「うっ・・・やられたわ。不覚だったわ・・・それよりも浮上しないと。伊織、浮上よ！」

だが、先ほどまで復唱を返してきた筈の伊織の声は一行に戻ってこない。

「伊織？」

慌てて立ち上がると、司令塔内は静寂に包まれていた。厳密に言えば、浸水が起こり艦体が沈んでいるらしく、水の音と艦が潜って行く音だけが響いてくる。

司令塔内を見回した律子は、ようやく床に倒れている伊織を見つけた。

「伊織・・・伊織！しっかりして！！」

慌てて駆け寄って体を持ち上げるが、彼女の腕はだらんと下がる。それが意味することは、律子にもすぐにわかった。

「う、嘘でしょ！？・・・あ、あずさんは？・・・！？」

あずさは壁際にいた。しかし、その表情と垂れ下がった腕を見れば、彼女が伊織と同じ運命であるのは一目瞭然であった。

「そ、そんな！？あずさんまで・・・だ、誰かいなの！？舵手！ソナー手！誰か生きてないの！？誰でも良いから答えなさい！」

だが舵手もソナー手も、既に物言わぬ存在となっていた。

「こんなことつて・・・」

その時、ようやく弱々しいが聞き慣れた声が律子の耳にはいる。

「律ちゃん！」

「亜美！？無事だったのね？」

やってきたのは、通信長の亜美だった。

「うん、けど律ちゃん。亜美以外皆ダメだったよ！！」

亜美は今にも泣きそうであった。律子も思わず泣きそうになるが、今の彼女にはやらなければならないことがあった。

「亜美、手伝って！とにかく浮上を試みるの！タンクの水をブローして！！」

「う、うん！」

2人はバルブに取り付き、なんとかタンクをブローして浮上を試みる。

だが、そもそも90人近い乗員で操る潜水艦を2人で操るのは無理がある。加えて、そこかしこで浸水が起こっているらしく、艦体は沈む一方であった。ついには司令塔内の床にも水が溜まり出した。

「律ちゃん！深度が120mを超えたよ！このままじゃ！」

深度計を見ていた亜美が叫ぶ。120mは875号の安全潜水深度であった。すぐに潰れると言うことはないが、このまま行けば水压で押しつぶされてしまう。

「この深さじゃもう脱出も出来ない・・・このままこの艦は水压に押しつぶされるだけ・・・」

律子は座り込んだ。そして自分の艦と、自分の運命を悟った。

「い、嫌だ！亜美はこんな所で死にたくない！！嫌だ！嫌だ！」

もはや逃れられない運命の前に、亜美が泣き喚く。

「ごめんね亜美。私がもっと用心していれば・・・」

律子の胸の中に、死の恐怖、後悔、そして目の前の亜美を救うことさえ出来ないことへの悔しさが渦巻く。

「本当にこれで終わりなの？・・・まだ出撃して1日目なのよ。敵の姿さえ見てないのよ！反撃もしてないのよ！！・・・それなのに終わりなの！？こんなバカなことがあつてのいいの！？」

その瞬間、脳裏に涼の顔が思い浮かんだ。

（絶対にただじゃ終わらせない！）

律子は立ち上がると、急いで司令塔脇の机へと向かった。そこには、奇跡的に濡れずに済んでいた便箋とペンがあった。

律子はペンを取り、便箋にメッセージを書き始める。

「律ちゃん？」

「このままじゃ、絶対に終わらせない！メッセージを残すわ！仇を！涼に仇をとってもらうの！」

「亜美にも貸して！」

2人は急いで便箋にメッセージを書き記す。律子は涼宛に、亜美は双子の真美宛に。

「急いで、早くしないと！」

「待つて！・・・よし、律ちゃんお願い！」

真美から便箋を受け取った律子は、自分の分と共に丸めて通信筒に入れた。そして水が入らないように厳重に封をすると、通信筒の発射管に入れた。

「お願い！届いて！」

発射ボタンを押すと、通信筒は海面に向かって発射された。

「さよなら。お母さん、お父さん、涼」

「さよなら真美」

通信筒を発射して間もなく、浸水によってバランスを崩した875号の艦体がひっくり返った。

「律ちゃん！」

「亜美！」

2人はお互いに体を抱き合い、最後の瞬間を迎えた。その直後875号は圧潰深度に達し、水圧が無残に艦体と2人の少女の命を押しつぶした。

こうして秋月律子率いるSS875号は、出撃2日目にして一矢も報いれぬまま、太平洋の海底深く沈んでいった。

「目標圧潰しました」

ソナー手が報告する。

「敵とは言え、この音には慣れたくないな」

「世界統一のための止むを得ない犠牲です。せめてもの情け、黙禱を捧げましょう」

「そうだね」

3人は顔さえ知らない敵潜水艦の乗員に、黙祷を捧げた。

「さて、それではどうします艦長？ここから移動しますか？」

「移動したいけど、燃料が心許ないの。多分さっきの潜水艦の救助に船がやってくるの。今度はそれを襲うの」

「わかりました。では、このままこの海域で待機しましょう」

875号の最後（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

死闘 上

875号と同時に横須賀を出撃した秋月涼率いる876号は、小笠原諸島沿いに南下していた。

「夢子ちゃん、現在位置は？」

「硫黄島の西北20海里つて所ね」

セイルには現在、艦長の涼と副長の桜井夢子が立っていた。また甲板上では水兵が双眼鏡で付近を警戒している。しかし、ここまで876号は平穩無事な航海を続けていた。

「予定通りだね・・・けど」

「やっぱり気になるのね？875号のことが」

「うん。本当だったら定時通信がある筈なんだけど、3時間前を最後に途絶えてる・・・何もなければいいんだけど」

従姉弟を始め、顔見知りの人が多い潜水艦の安否を涼は気に掛けていた。また夢子も口には出さなかったが、先輩のあずさの身を案じていた。

「艦長。艦隊司令部から無電が来ていますよ」

ハッチから顔を出したのは、通信長の鈴木彩音だった。

「あ、鈴木さん。御苦勞様」

「どうやら大変なことが起こったみたいですよ。とにかく読んでください」

「あ、はい・・・876号は現在の任務を中止し、至急択捉島東方40海里地点へ向かえ？たしか、875号がいる筈の海域だ。」

「やっぱり何か起きたのかしら？」

「わからない。とにかく急ごう。鈴木さん、艦隊司令部には了解とだけ返信して下さい」

「了解」

続いて涼は伝声管で艦内にいる航海長の絵理と、機関長の愛に命令する。

「絵理ちゃん。至急択捉島への最短針路を出して」

「了解？」

「愛ちゃん。全速で向かうから、このまま浮上で機関全開で行くよ」

「わかりました！エンジン全開で突撃！！」

「律子姉ちゃん・・・どうか無事で」

875号は水上を、エンジン全開で進んでいった。

「左舷に島影を確認！択捉島よ！」

「そろそろ875号が消息を絶った海域だ。見張りの数を多くして」

「わかってる」

やがて、876号の周囲に多くの漂流物やどすぐろい重油が纏わりつき始めた。

「機関停止！漂流物を引き上げて！」

命綱を付けて竿を持った乗員たちが、漂流物の回収を始めた。

「艦長！見てください！」

集められた物がセイルに立つ涼に渡された。最初に渡されたのは重油まみれの救命胴衣の破片だった。そこに書かれた文字を見て、涼は目を見開いた。

「SS875号！？」

さらに様々な物が引き上げられた。制帽やぬいぐるみ、ハンカチ等、乗員の持ち物らしい物もたくさん含まれていた。

「これは艦長帽！こっちのぬいぐるみは伊織さんのだ！？」

「こ、このハンカチはお姉さまのよ！？じゃあ、やっぱり875号は……」

そこへ、水兵が新たな回収物を渡してきた。

「通信筒です！！」

キャッチした涼は急いで封を開けた。中からは2通の便箋が出てきた。

「これは律子姉ちゃんの字だ・・・こっちは・・・亜美ちゃんのだ・・・」

涼は律子の書いた手紙を読む。

「・・・音波障害を起こして、敵の位置がわからない内に突然攻撃をされたと書いてある・・・」

他にも艦と乗組員を失ったことへの詫びの言葉、そして家族や友人に対する別れの言葉も書かれていた。だが涼の目を特に引いたのは、最後の一文だった。

「涼、私たちの仇を必ずとってね・・・律子姉ちゃん」

涼の目から止め処なく涙が落ちる。彼の後ろに立つ夢子もすすり泣いていた。

「律子姉ちゃん。姉ちゃんやいおりさんたちの仇は、僕たちが必ずとるよ」

涼は拳に力を入れ、律子の復仇を誓う。

だが感傷に浸ってられる時間は短かった。

「艦長！音波が混乱しています！艦の周りを何かが囲んでいます！」

涼は律子と亜美の手紙を仕舞うと、すぐに頭を切り替えて命令を下す。

「浮遊物の回収を中止して！乗員は艦内へ！戦闘配置！愛ちゃん、機関始動！！」

「了解！」

すぐに876号のエンジンが始動し、スクリューが回り始めた。

「ソナーも聴音機もダメです！」

「もしかして、これが姉ちゃんの書いていた音波妨害・・・」

「そうになると、怪潜は近くにいることになるわね。けど涼、ソナーも聴音機も使えないんじゃないじゃこっちはツンボよ。下手すれば875号の二の舞・・・」

夢子が不安げな表情をする。ソナーと聴音機と言う索敵手段を失った状況では、敵を探知など出来ない。何時不意打ちを喰らうかわからない。

だが、対照的に彼女の方を振り返った涼の表情は自信に満ちていた。

「大丈夫だよ夢子ちゃん。僕は誓ったんだ。律子姉ちゃんたちの仇を絶対にとるって。それに、姉ちゃんが果たせなかった艦長としての務めを果たす・・・皆の命を預かるよ。大丈夫、必ず僕たちは全員生きて帰れる！」

「・・・そ、そうよね。こんな所で弱気になってたら、死んだお姉さまに顔向けできないわ。けど、どうするの？」

その時、まだ甲板に残っていた水兵が叫んだ。

「艦長、何か海面で光っていますよ！」

「え！？・・・」

すぐに水兵がそれを引き上げた。

「何か銀紙みたいなものです！」

「貸して！」

受け取った涼は、それが何であるかすぐに気づいた。

（これはレーダーの電波を攪乱するチャフかな？・・・そうか、これで音波を攪乱していたんだ。となると、こいつを流したやつは近くにいるはず）

「夢子ちゃん、潮流は今どっちへ流れている？」

「え！？東から西へ向かっているけど」

「じゃあ、艦を潮の流れが来ている方向へ走らせて」

「わ、わかったわ。針路10度」

「了解？針路10度」

艦内の絵理がすぐに針路を修正させた。

「おそらく、こいつを流している敵は流れの上のほうから紛れて接近してくるに違いない・・・」

「どうするの？」

「・・・」

その頃、涼の読みどおり875号を葬ったU961が876号の前方から接近しつつあった。

「フッフ。思ったとおり罠に掛かってくれたの。この間の艦のようにさっさと沈めちゃうの」

「美希、そろそろ接触する頃だぞ」

「マグネリード射出用意！」

美希は前回と同じ手で876号を襲撃しようとしていた。

「・・・スキップ・ジャック発射！」

涼はスキップ・ジャックの発射を命じた。スキップ・ジャックとは後甲板に搭載されている連装式の対潜ロケット爆雷発射機である。水中では敵の推進機音を感知してオートシュートも可能となっている。また水上から水中目標へも発射できる。

「了解？けど、目標は？」

艦内の絵理が問い返す。

「前方に向かって適当でいい。構わないからドンドン撃って！」

「了解！スキップ・ジャック発射シュート！！」

バシュ！

軽快な音を立てて、スキップ・ジャックが前方の海面へと飛んでいく。

「弾の続く限り発射して！！」

ドガン！

着水したスキップ・ジャックの弾体は一定深度まで潜ると爆発する。その爆発音はU961でも探知できた。

「あ！？爆発音です！」

「な、何だつて！？美希！？」

「落ち着くの響。大方めくら撃ちしているだけなの。そんなの当りつこないって。その前に仕留めてやるだけなの。マグネリッド発射！」

美希は自信を持って答えると、マグネリッドを射出した。

だが、その直後U961を凄まじい衝撃が襲った。スキップ・ジャックが至近弾となったのである。

「キャア！？」

「わあ！？」

「しまったの！被害報告！」

「涼！見て右舷前方に気泡よ！・・・あ！？救命ボートが浮き上がったわ」

夢子が海面に浮き上がった救命ボートを見つける。涼もすぐに確認した。

「やった！損傷を与えたんだ。いいぞ、重油も浮いてきた。かなりの損傷を与えたみたいだよ」

「どうする？止めを刺す？」

絵理が確認を求める。

「待って絵理ちゃん。スキップ・ジャック発射止め！敵の乗員を捕らえよう」

「涼？」

夢子が涼の顔を見つめる。どうしてそんな判断を下したのか理解できなかったからだ。

「律子姉ちゃんたちを殺した憎い敵だけど。U結社の情報は重要なんだ。それを持ち帰るのが僕の艦長としての役目だよ」

「わかったわ。私たちは涼の命令に従うわ」

夢子が頷いた。

「ありがとう。夢子ちゃん、敵はすぐに浮上してくるだろうから砲戦の用意を！それから機銃も上げて置いて！」

「了解！」

「機関室浸水！」

「魚雷発射管室浸水！」

U961の被害状況は、美希たちの予想以上に甚大だった。

「排水ポンプをフル稼働させるの！それから修理を急いで！」

だが、部下から上げられた報告は美希たちの対応をあざ笑うがごとき物であつた。

「浸水が激しすぎます！とても排水が追いつきません！」

「う！？」

見れば、美希たちが陣取る司令塔内の足元も水浸しになっていた。

「星井美希、もはや復旧は絶望的です！ここは浮上するしかありません！」

貴音の忠告を受け、美希も決断した。

「仕方が無いの。急速浮上！」

「了解。急速浮上！」

「涼！あそこ！」

「出たな。速射砲撃ち方用意！敵はロケット砲で反撃してくるだろうから、まずは敵のロケットランチャーを狙って撃てー！」

876号の全部甲板に搭載されている速射砲塔が旋回し、浮上してきたU961に目標を定める。

「砲撃開始！！」

バンバン！

「撃つて来たの！こっちも早くロケット砲で反撃するの！」

「わかってるさ！ロケット砲撃て！それから携帯火器を持っている奴は早く上がれ！！」

バシユバシユ！

遅ればせながらU961のロケット砲も反撃を開始する。両艦の周囲には着弾による水柱が立つ。

「キャ！」

「夢子ちゃん伏せて！」

2人も水柱によつてずぶ濡れだ。

「怯むな！ドンドン撃つて！機銃も援護射撃！」

ドガガガ！！

前後のハッチから上げられた機銃が射撃を開始した。

ガンガンガン！

被弾による衝撃と音が美希たちにも伝わってくる。

「く！？こつちも早く反撃するの！」

「携帯火器を持っている奴はとにかく撃て！」

バンバンバン！

自動小銃を持った乗員が876号に向かい射撃する。それに対して、876号の機銃の射撃が集中する。

ドガガ！！！！

「うわ！」

「が！？」

さらに。

ドグワーン！

ロケット砲のランチャーに砲弾が直撃した。

「ああ！？ランチャーがやられたさ！！」

「うぬ！艦首を敵に向けるの！！魚雷で反撃するの！！」

しかし、間もなく2人が立つセイルに機銃弾が集中した。ロケット砲のランチャー、そして携帯火器の制圧を終えた機銃は、その照

準を艦橋に集中したのである。

「きゃあ!？」

「うわああ!？」

2人の体を銃弾が貫くまでに、時間は掛からなかった。

「美希!？響!？」

2人が倒れたのに気づき、艦内で指揮を執っていた貴音がセイルに上がる。

「何をやっているのですか!？救護兵をセイルに!!それから早く艦首を敵に向けなさい!」

だが帰ってきたのは部下の悲痛な声だった。

「航海長、大変です!ロケット砲の弾庫に火が!」

「!？」

「涼、攻撃が止んだわ」

「よし。じゃあ、敵艦を制圧し・・・」

ドグワン!!!

「「あ!?!」」

2人の目の前で、U961が吹き飛んだ。

死闘 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

死闘 中（前書き）

今回は半分以上オリジナルとなっています。また本来なら原作で前話の前に来るエピソードを使っている部分もあります。

死闘 中

875号の目の前でU961は大爆発を起こし、真つ二つになつて沈んでいった。

「しまった！弾薬庫に誘爆したんだ！」

「どうするの？」

「そんなの決まってるよ。機関停止、ボート降ろし方用意！生存者を救助するよ。手空き乗員は上甲板へ。まなみさん……軍医は負傷者の手当てに備えてください」

「了解です」

軍医の岡本まなみは、医務室で患者の受け入れ準備に入った。

機関を止めた876号は、惰性でU961が沈んだ場所へと近づいた。甲板ではゴムボートが用意され、さらに救助に備えて竹ざおを持った乗員が生存者の姿がないか探す。

「あつと言つ間に沈んじやつたわね」

「けど、もしかしたら1人位生存者がいるかもしれない。とにかく、時間の許す限り探そう」

そんな涼の想いが実つたのか、間もなく数名の人影が浮いているのが発見された。

「漂流中の人影発見！」

「ボートを出してすぐに収容して！」

「了解です！」

用意されていたゴムボートが降ろされ、すぐに発見した生存者を助けあげた。

「発見されたのは5名！内女性が3名で男性が2名。男性は既に2人とも死亡しており、女性3名も意識がありません！！」

「だったら急いで医務室に収容して！」

「わかりました！」

すぐに生存者3名が艦内に収容された。

「艦長、他には生存者は見当たりません」

「了解。鈴木さん、自衛艦隊司令部からは何か言ってきました？」

「現状報告を行いました。何も言ってきませんよ」

通信長の彩音がぶっきらぼうに答える。

「わかりました。じゃあ、僕たちはこの海域に留まる。875号の漂流物ももう少し搜索したいし」

「そうね」

876号はそのまま海域に留まり、875号とU961の生存者や漂流物の搜索を続行しつつ、次の指令を待った。

「うーん・・・」

貴音が目を覚ますと、見知らぬ天井が視界内に飛び込んできた。

（生きてる？・・・確かロケット砲の弾薬庫の爆発に巻き込まれて・・・吹き飛ばされて海に落ちて・・・）

「こ、ここは？」

「あ、目を覚ましたんですね？」

声のした方を向くと、眼鏡を掛けた女性の姿が目に入った。そして彼女が着ている海自の制服も。

「ここは？」

「ここは876号の医務室です。あなたは意識のない状態で救助されたんです。幸いにも、打撲以外には傷は見られませんから、すぐに良くなりますよ。あ、待ってください。今涼さん・・・艦長を呼びますから」

まなみは艦内電話に取り付き、どこかへと電話を始めた。しかし貴音にはそんなことどうでもよかった。

（私は捕虜になったのですね・・・他の乗員はどうなったのでしょうか？）

「よろしいでしょうか？」

「はい？」

「私以外の乗員はどうになりましたか？U961はどうになりました？」

「残念ですが、あなた以外に救助された2人は手の施しようがなく
て。その他のことは、艦長に聞いたほうが良いでしょう」

「わかりました」

まもなく、医務室の扉がノックされた。

「失礼しますね、まなみさん」

「あ、涼さん・・・じゃなくて艦長。御苦勞様です」

（この少年がこの艦の艦長・・・）

「初めまして。海上自衛隊潜水艦SS876号艦長の秋月涼一等海尉です」

「U961号航海長の四条貴音です。この度は救助していただいたことに感謝します・・・U961、私が乗っていた艦はどうになりましたか？」

「あなたの艦は轟沈でした。大爆発して真っ二つに割れて沈みまし

た」

「そうですか・・・助かったのも私だけですか？」

「ええ。他に4人を救助しましたが、2人は既に事切れていました。残る2人も、間もなく亡くなりました。艦内には収容しておく余裕がなかったので、水葬としました。申し訳ありません」

「いえ。敵である我々にそこまでしていただけても光栄です」

「あの、貴音さんでしたね？あなた方が撃沈した潜水艦について聞きたいのですが、よろしいですか？」

「構いませんが、何故？」

「あの艦の艦長は僕の従姉弟でした。他にも友人が乗っていました」

「・・・そうでしたか。さぞ私が憎いでしょうね？」

「・・・あなたの艦を沈めるまではそうでした」

「!？」

「けどあなたの仲間の遺体を水葬に臥した時、そんな気持ちは吹き飛びました。先ほど水葬にした2人は、あなたと同年代・・・僕の従姉弟と同年代の少女でした。僕は彼女達を殺したんです・・・そう考えると」

「それで良いのではないのでしょうか？」

「え！？それは―「涼！急いでブリッジに来て！」

涼の言葉を遮るように、艦内の呼び出しようインカムから夢子の声が響いた。

「了解！貴音さん、話はまた後で」

「ええ・・・秋月涼、あなたの奮戦に期待しています」

涼は医務室から司令塔へと急いだ。

「どうしたの？」

すると、詰めていた航海長の絵理が振り返った。

「ソナーが故障。敵が来たらまずいことに？」

「故障！？どうして？」

「多分さっきの戦闘の影響。音波妨害でツンボだったから、気づくのが遅れた」

「わかった。僕はセイルに上がるから」

涼はハシゴを上り、セイルへと上がった。

「夢子ちゃん！」

「涼！」

「ソナーは!？」

「今修理しているけど・・・」

涼が艦首を見ると、数人の水兵がソナーに取り付いていた。

「状況は!？」

「ゴムパネルが裂けて中で断線しています! 応急修理でなんとか出来そうです!」

「急いで! こんな状況で襲われたら厄介だ!」

涼の叱咤を受けるまでもなく、水兵たちは一生懸命だった。

「わかってます!」

「涼、どうする?」

「うーん・・・」

涼が判断に困っている所に、彩音が報告してきた。

「艦長、自衛艦隊司令部から通信が来しましたよ。大湊から出港した3隻の護衛艦、それに天海艦長のSS765号がこちらに向かっているそうですよ。876号はそれらの到着を待てとのことですよ」

「しょうがない。このまま待機するしかないね」

そこに、新たな連絡が入る。今度は医務室のまなみからだった。

「どうしたのまなみさん？」

「四条さんが話したいことがあるそうです」

「・・・代わって下さい」

すぐに貴音が出た。

「秋月涼、すぐにこの海域を立ち去りなさい」

「何故です？」

「現在我々の艦隊は北太平洋に活動海域をシフトしています。我が艦が沈んだことに気づけば、手近な艦が確認にやってくるでしょう。場合によっては複数の艦が集まってきます」

「どうしてそんな情報を僕に？」

「さあ？何故でしょうね。私からは以上です」

そう言つと、貴音は一方的に会話を打ち切った。

「涼、今の言葉を信じるの？」

「うーん・・・可能性としてはなくもない。けど、この海域から僕たちを遠ざけても得られるメリットなんからないはず。それに」

「それに？」

「さつき話して感じたけど、あの人はとても嘘を付くような人には思えなかった」

「じゃあ信じるの？」

「信じるにしても、僕たちはこの海域を離れるわけにはいかない・・
・夢子ちゃん、水上見張りを厳にして！」

「わかった」

「絵理ちゃん、速射砲とスキップ・ジャックを何時でも撃てるように。愛ちゃんは機関を全開に出来るようスタンバイして」

「了解？」

「わかりました！！」

さらに涼は、ソナーを修理中の兵士にもう一声掛ける。

「ソナーの修理を急いで！！」

「わかってます！」

876号の水兵は必死に作業を進めた。しかし運命の女神は、876号に試練を課す方を選んだ。

「右舷30度に潜望鏡！」

「しまった！？」

876号を捉えたのはU961の同型艦のU1054だった。

「敵だ！間違いない、傍受した敵電にあった海自の876号だ！」

潜望鏡越しに、U1054艦長東豪寺麗華は876号を確認した。

「どうするの？あの艦にはU961の四条貴音が救助されているみたいだけど？」

副長の三条ともみが聞く。

「そんなの決まっているだろう？貴音には悪いけど、沈めるだけだ」

「敵に情報を与えるわけにはいかないからね。にひひ」

航海長の朝比奈りんが笑う。

「それに、876号の艦首のソナードームを修理している。やつはツンボみたいだ。チャンス以外の何物でもないぞ。艦首を876号に向ける！艦首魚雷戦用意！！」

その頃、海上からは大湊を出港した3隻の護衛艦「まきなみ」「たかなみ」「うらなみ」が全速力で現場に急行中であつた。

「急いで！絵理たちが危ないわ」

「まきなみ」艦長の尾崎玲子一等海佐は絵理の教官も務めたこともあり、気が気でなかった。

「うっうー、涼君も夢子ちゃんも無事で」

同艦航海士の高槻やよい三尉も、友人である涼と夢子の身を案じていた。

「どうするの涼!？」

「スキップ・ジャック発射!」

バシュ!バシュ!

2回弾が出たところで、発射が止まった。

「どうしたの!？続けて撃って!!」

だが絵理から最悪の返答が帰ってきた。

「それは無理」

「絵理ちゃん!？どうして?」

「さっきの戦闘で弾がスツカラかん。今ので撃ち止め」

いきなりの報告に、涼と絵理の顔が青くなる。

「ちょー！！涼どつするのよ！？」

「落ち着いて夢子ちゃん。とにかく、何でもいいから反撃するしかない。速射砲、敵の潜望鏡を狙って撃って！」

「速射砲で小さな潜望鏡をやれるかしら？」

「わからない。けど、他に方法がないんだ。撃て！！」

ドンドン！

前甲板に設置された速射砲が砲撃を開始する。

砲弾が海面に着弾し、次々と水柱を立てる。だが、命中しているかまではわからない。

「ダメです！潜望鏡が出たままです！」

水兵の報告は、弾が命中していないことを意味していた。

「もっとよく狙って撃って！潜望鏡を引っ込めない所を見ると、雷撃してくる気だよ！」

「舐められているのよ！こっちが潜航出来ないのを知ってるのよ！」

夢子は悔しさのあまり、歯軋りしたい気持ちで潜望鏡を睨みつけた。

「フッフ・・・どこを狙っているんだか・・・魚雷発射用意!!」

潜望鏡を覗きながら、余裕の表情で麗華は照準を定めた。

「1番管2番管発射準備よし!3番から6番までも準備よし!」

「いつでもいいよ。ニヒヒ」

「いいかやるぞ・・・1番2番発射!続けて6番まで連続発射!」

直後、U1054から6本の魚雷が発射された。

死闘 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

死闘 下

「876号を確認！」

3隻の護衛艦が876号を目視出来る距離に到達した。

「876号が浮上して砲撃しているわ！これはただごとじゃないわね！」

双眼鏡で876号の艦影を確認した「まきなみ」艦長の尾崎玲子一佐は、876号に起きている深刻な状況を読み取った。

「うつうー！急ぎましょう艦長！」

航海士の高槻やよい三尉が声を張り上げる。

「わかってるわ。高槻さん！これより我が戦隊は876号を援護するわよ！」

だがそう簡単には、問屋が卸してはくれなかった。

この時海中に潜んでいた怪潜は麗華たちのU1054だけではなくかった。

「自衛艦だ！雷撃戦用意！！」

この時付近の海面には、U1054以外に3隻の怪潜が集まっていた。

「ソナーに感度！右舷に潜水艦が接近中！」

「何ですって！？」

さらに報告は続く。

「左舷30度に潜望鏡！」

「出たわね。けど、今は876号の救援が先よ。後続の「たかなみ」と「うらなみ」に捕捉して攻撃するよう伝えてちょうだい！」

だが尾崎の目論みは直後に打ち砕かれた。

「艦長！「たかなみ」と「うらなみ」も別の怪潜を攻撃中です！」

「何ですって！？」

尾崎が後続の2隻に双眼鏡を向けると、確かに2隻が爆雷とヘッジホッグを投下して対潜戦闘を行っていた。

「むう。この辺りには怪潜がウヨウヨしているようね」

「左舷に魚雷です！」

海上を見張っていた乗組員が悲鳴を上げた。

「面舵一杯！！」

この魚雷は尾崎の素早い回避命令でなんとか交わす。「まきなみ」の左舷を二条の雷跡が伸びていった。

「何とか交わせたわね。対潜戦闘用意！」

「艦長！もう一隻別の奴が接近しています！」

ソナー手が緊迫した声で報告してきた。

尾崎は唇を噛んだ。この状況ではとてもではないが876号の救援など行っではいけない。自分たちの生命を守るほうが先決である。

「高槻さん、残念だけど876号の救援は後回しよ」

「うー、仕方ありません」

「正面の敵から攻撃するわよ！！魚雷に気をつけて！！」

その頃、U1054は876号に向かって魚雷を発射していた。

「全弾発射完了よ」

「OKともみ・・・潜望鏡を下げて。この距離なら外しっこない。すぐに命中する」

U1054の艦長東豪寺麗華は余裕綽々で、勝利を確信していた。

対して876号は絶対絶命であった。

「右舷に魚雷！数6本！」

6本の魚雷が、白い航跡を残しながらまっしぐらに876号目指して走ってきた。

「取り舵一杯！！」

涼が回避命令を出す、あまりにも魚雷は接近していた。

「ダメです近すぎます！」

「りよ、涼！！」

夢子が悲鳴を上げた。

「総員魚雷の命中に備えて！」

1本目は艦の右側を素通りした。2本目もギリギリ回避。しかし3本目は避けられそうになかった。

「当る！皆何かに掴まって！！夢子ちゃん！！」

「え！？」

涼は夢子の体に覆いかぶさる。せめて側にいる彼女だけでも守ろうとしたのだ。

艦内では絵理や愛、彩音が手近な物に捕まって衝撃に備えた。

「貴音さん、魚雷が来ます。衝撃に備えて！」

だが医務室の貴音は、目を瞑りベッドに腰掛けたままでまなみに
一言いうだけであった。

「心配ありません。秋月涼なら大丈夫です」

「え!？」

その後、幾ら待っても魚雷の爆発による衝撃どころか、魚雷が命中した衝撃さえこなかった。

「あれ!？生きてる?」

「どう言うこと?」

機関室では愛が目をパチパチさせ、司令塔では絵理が首を捻っていた。

セイルの涼も一行に魚雷の命中が起きないため、恐る恐る顔を上げた。

「どうなっ たんだ?」

そして魚雷を撃った麗華たちも困惑していた。

「おかしい・・・とくに命中時間は過ぎているのに」

腕時計を見ながら麗華が首を傾げた。

「魚雷の故障かしら?」

「どうなってるの?」

すると、ソナー手が報告してきた。

「艦長、魚雷と876号の推進器音がいまだに聞こえます」

「何だって!? 潜望鏡を上げて!」

彼女が目にしたのは、未だに海上を悠然と航行する876号の姿だった。

涼が海面を見ると、魚雷の雷跡が艦を跨いで反対側へと伸びていた。

「しめた! 魚雷は艦底の下を通過したんだ!」

「りよ、涼?」

「やったよ夢子ちゃん! 僕たち助かったんだ!」

「それはわかったから・・・あの、体を離して欲しいんだけど?」

「え!?!...うわ!?!ごめん!」

涼はずっと夢子を抱きかかえた状態になっていた。慌てて離れる涼だったが、夢子の方は嬉しそうであった。

「べ、別に構わないわ。りょ・・・艦長は私のためを思ってやってくれたんだから」

「う、うん・・・」

2人とも顔は真っ赤だった。

艦内では直視しているわけでもないのに、絵里たちが2人のラブ臭に気づいていた。

「絵理さん・・・じゃなくて航海長。また艦長と副長の悪い癖が始まったみたいですよ。注意してください」

「了解？・・・涼さんも夢子さんも任務を忘れないで!!」

インカム越しに怒鳴られ（しかも絵理に）、2人はすぐに艦長と副長に戻った。

「あ、ごめん！」

「いけない!!」

「「たく」「」

そして医務室では。

「これまた面妖なこと」

と貴音が驚き半分、呆れ半分の感想を漏らしていた。

「しまった！距離が近すぎて魚雷が876号の下を潜ったんだ！」

「どうするのよ？接近し過ぎてもう魚雷は使えないわよ？」

ともみの言葉にも関わらず、麗華は余裕を崩さない。

「だったら近づき過ぎたついでに、このままあいつの下に潜ってマウス・キッドを撃ち込もう・・・うん？」

「どうしたの？」

「向きを変えた。また砲撃してくる気だ。潜望鏡を下げて。潜航。りん、このまま奴の下に潜って」

「了解」

「今度こそ仕留めてやる」

だが、この余裕が命取りとなる。

「速射砲ドンドン撃って！！」

涼の命令により、速射砲が潜望鏡が消えた付近の海面を再度砲撃する。

その内の1発が、U1054の前部甲板を直撃した。

グワーン！！

「な！？」

「ウソー！？」

「しまった！！どこをやられた！？被害報告！！」

「前部甲板に直撃です！！マウスキッドがやられました。全損して使用不能！！それに兵員居住区などにも浸水！浸水拡大中！！」

「排水ポンプ全開！ちっ！魚雷も発射不能、マウスキッドもダメとなれば浮上戦闘しかないな。急速浮上！！水上戦闘用意！！」

「ちょっと麗華本気！？このまま潜航して魚雷の再装填を待てば良いんじゃない？」

「ダメだ。その間に876号がソナーの修理を終わらせるかもしれないし、それに浸水のダメージも酷くなってる。このままじゃ二度と浮上出来なくなる。だったら一か八かだ」

「わかったわ。急速浮上！水上戦闘用意！！」

「浮上したら携帯火器も上げろ！」

「あ！？敵が浮上します！！」

水兵の報告に、涼はすぐに反応した。

「砲弾が命中したんだ！速射砲は射撃目標を変更！機銃も速射砲を援護！！目標右舷の怪潜！撃て！！」

876号の速射砲がU1054に照準を合わせて、射撃を開始する。

ドンドン！

ダダダ！！

対して、U1054でもセイルに出た麗華とともみが戦闘の指揮を行う。

「ロケット砲用意！！急いで！」

ともみが命令を行う間に、麗華が双眼鏡で大まかな測距を行う。

「左舷35度！距離900m！続けて撃て！！」

バシユバシユ！

双方共に相手の砲弾の水柱に包まれる。しかし、射撃を開始したのが早い876号が先に命中弾を出す。

ガガン！ガガン！

「うわっ!？」

「く!？」

セイルに飛び込んだ弾に、麗華とともに悲鳴を上げる。

「左舷タンクに被弾!セイルにも損傷!！」

「こっちの携帯火器は何をしているんだ!?!早くあの機関銃を黙らせる!！」

「わかってるよ!！」

すぐに自動小銃を持ったりんと、もう1人の兵士が上がってきた。

「それ撃て!！」

ダダダ!!

しかし彼らの撃った銃弾は876号の機関銃ではなく、セイル周辺に着弾した。

「夢子ちゃん!伏せて!・・・っ!？」

涼の表情が歪む。

「涼!?!大丈夫!？」

「大丈夫。掠っただけだよ」

「良かった。機銃はあの機銃に狙いを集中して!!」

夢子に命令を出されるまでもなく、876号の機銃はU1054の自動小銃を狙った2人に射撃を集中した。

ドガガガ!!

「ぐわ!?!」

まず1人が撃ち倒された。そして、残るりんにも機銃弾は容赦なく向けられた。

「きゃあ!?!」

「りん!?!」

「救護兵は急いで甲板へ!! ロケット砲は何してるんだ!?! 早く沈めろ!」

やる方も必死なら、相手も必死である。それが戦場と言うべき物だった。涼は弾が掠った腕を押さえながら、指揮を執り続ける。

「もつとよく狙って!! 距離が近いんだから絶対に当たるよ!」

そして、876号の砲弾がU1054のロケット砲に直撃、さらに艦の後部に集中的に命中弾が出た。また射撃を続けていた機銃弾が、セイルで指揮を執る麗華とともに襲い掛かった。

「うわ!?!」

「キヤ!？」

その直後、U1054は大爆発を起こした。

「やった・・・撃ち方止め!救助用意!」

そこへさらに吉報が届けられた。

「艦長、お待たせしました。ソナー修理完了です」

戦闘中に関わらず、必死に修理作業を続けていた乗員がずぶ濡れになりながら報告してきた。

「わかった。皆御苦勞様。ゆっくり休んで」

「ありがとうございます」

「ふー。これで一段落かな?」

「それよりも涼、ケガの手当てをしないと。まなみさんに来てもらおうか?」

「じゃあ頼むよ、夢子ちゃん」

「まなみさん、セイルへお願いします」

それから間もなく、軍医のまなみがやってきて涼の傷を消毒して包帯を巻いた。

「はい、これで大丈夫です。掠り傷ですから、すぐ良くなりますよ」

「ありがとう・・・僕の治療が終わった所悪いんですけど、敵艦の負傷者が収容されると思うんで、そちらの準備もお願いします」

「わかりました」

まなみはすぐに艦内へと戻って行った。

そして彼女と入れ替わる形で、救助の指揮を執っていた乗員がやってきた。

「艦長、要救助者1名を収容。女性です。それ以外には確認できませんでした」

「わかった。すぐに医務室に収容して・・・あとは、後続の自衛艦と合流するだけかな？」

「これで本当に一息つけるわね」

涼と夢子を、楽観的な空気が包んだ。しかし、その空気はコンマ数秒で消失する。

「艦長、ソナーに反応！敵艦です！！」

死闘 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

次回最終話・・・の予定。

戦いの果てに（前書き）

これで完結です。ありがとうございました。

戦いの果てに

「艦長！左舷に潜望鏡です！」

双眼鏡を海面に向けていた水兵が叫んだ。

「しまった！怪潜だ！」

「まだいたの！？一体何隻いるのよ！？」

2人ともいい加減うんざりしていたが、もちろん愚痴を言うてる余裕などない。涼はテキパキと指示を出す。

「愛ちゃん、機関始動！絵理ちゃん、潜航用意！」

「了解！！」

すぐに機関が始動し、さらに潜航の準備に入った。

「今襲われたら一溜まりもないぞ・・・」

涼の予感はずだった。ソナー手が悲鳴のような声を上げた。

「敵艦に魚雷発射音！」

「来たな！回避はもう間に合わない。急速潜航！乗員は中へ！」

「了解。急速潜航！全タンクフル注水！！」

「了解。急速潜航」

「機関停止！バッテリーに切り替え！！」

涼だけでなく副長の夢子、航海長の絵理、機関長の愛がそれぞれに指示を出して876号を潜航させる。タンクに水が入ると同時に、運転不能となるディーゼルが停止し、バッテリーによる運転に切り替わる。

また甲板上で作業をしていた乗組員も、手近なハッチから艦内へと戻る。

「うわああ！」

既に甲板にまで水が来ていたので、水兵たちも必死である。しかし、なんとか1人も流されずに済んだ。

「乗員収容完了！涼、私たちも」

「うん！」

最後にセイルにいた夢子と涼が艦内に入った。この時点で水はセイルにまで来ており、涼が中へ入った直後に艦体が全没した。

「深度7m。今司令塔沈下」

絵理が深度計を読み上げる。

「魚雷接近！」

ソナー手の報告に、涼も夢子も表情が厳しくなる。

「よ、避けられるかしら？」

「わからない。司令塔さえ避けてくれれば大丈夫だとは思うけど」

「もし敵の魚雷がホーミングだったら？」

「その時は終わりだ・・・」

「魚雷さらに接近！」

「深度10m！」

シュルシュル・・・

ソナーを介さなくても、魚雷の推進音が直に聞こえるまでに近づいた。

誰もが無言であったが、その中で夢子は片手を涼の手に合わせた。涼も彼女の手を強く握った。

1本目はその内に音が徐々に小さくなって行った。

「1本目は素通りしたね・・・」

だがまだ安心できない。ソナー手が報告をする。

「2本目が来ます！」

シュルシュル・・・

再び魚雷の推進器音が近づいたが、こちらもその内徐々に小さくなって行った。

「しめた！敵の魚雷はホーミングじゃない！通常魚雷だ！」

「さらに3本目来ます！」

「これさえ避ければ・・・」

シュルシュル・・・

再び魚雷の推進器音が大きくなる。しかも、2本目と違って一行に離れる気配がない。涼は万が一を考えて叫んだ。

「総員何かにしがみついて！」

876号の乗組員が一斉に身構えた。

シュルシュルシュル・・・

魚雷の推進器音がこれまでになく大きくなった。その直後、徐々にその音が小さくなっていった。

「魚雷外れました！・・・後続の魚雷は確認できません！」

ソナー員が嬉しそうな声を上げた。

「やったわね！涼！」

「ようし！今度はこっちの番だ！取り舵一杯！前部魚雷発射管、魚雷戦用意！！」

「了解？」

876号が回頭する。

「敵艦本艦の左舷40度・・・おや？」

ソナー手が首を傾げた。

「どうしたの？」

「敵艦の後方にスクリー音を確認」

「まさか、新手の怪潜じゃないでしょうね？」

夢子が尋ねるが、ソナー員は難しい表情のまま答える。

「いえ、これは怪潜の物では・・・あ！？魚雷発射音！怪潜の後方の艦からです！」

それから1分ほどして。

ドグワン！！

876号に爆発音が届いた。

「怪潜に魚雷命中！沈みます！・・・不明艦さらに接近！」

「貸して！」

「は！」

涼はソナー手からヘッドフォンを受け取ると、自分の耳に当てた。そしてその表情は見るからに明るくなる。

「大丈夫だよ。夢子ちゃん、艦を浮上させて！」

「わかったわ。絵理、浮上よ！」

「了解？・・・ところで、2人は何時まで手を繋いでいるの？」

「え！？・・・あ！」

2人は慌てて手を離す。

絵理はジト目で、他の乗組員もニヤニヤした表情で2人を見る。

「ええと・・・とにかく浮上したら外に出るよ」

「そ、そうよね。不明艦の正体を確認しないと」

そう言うのと、2人はさっさとハッチを昇りはじめた。

「リア充死ね？」

絵理が呟くに言った言葉は、2人の耳には届かなかった。

876号が浮上すると、すかさず涼はセイルの上へと出た。夢子も後に続く。

「ねえ涼、不明艦の正体は一体何なの？」

「すぐにわかるよ・・・あそこに浮上するよ！」

涼が指差した先で、1隻の潜水艦が急速浮上してきた。876号とはほぼ同じ形の艦体に前部の5インチ砲、そして特徴的な艦橋とそこに描かれた765の文字。

「765号だわ！」

「そう。春香さんたちが来てくれたんだ。愛ちゃん、絵理ちゃん。765号と併走して」

「了解」

「765号が来てくれたのなら、もう安心ね」

「うん、けど自衛艦の方は大丈夫かな？」

涼が目をやると、水平線上に黒煙が3条立ち上っていた。

そんな彼の不安を吹き飛ばすように、夢子が双眼鏡で確認する。

「涼！自衛艦が来るわ・・・」まきなみ「よ」

煙が立ち上る方向から、護衛艦が1隻接近してきた。さらに。

「艦長！765号からボートが来ます！」

涼はすぐに双眼鏡でそちらを確認する。

「春香さんだ！それに・・・真美ちゃんもいる・・・」

「気が重いわね」

「うん」

間もなく、春香と真美を乗せたゴムボートが876号に接舷した。涼と夢子はセイルを降りて、甲板へと移動した。

「春香さん、真美ちゃん。ようこそ876号へ」

「涼君、夢子ちゃん。良かった無事で」

「戦闘中って聞いて心配したんだよ」

「ありがとうございます。おかげさまで僕たちは何ともありませんでした。けど、律子姉ちゃん・・・875号は撃沈されました」

「報告は私も聞いたわ。本当に気の毒に・・・けど、仇は取ったんでしょ？」

「はい・・・あの、それで真美ちゃんに渡したいものが」

「私に？」

涼は律子の手紙に同封されていた亜美の手紙を差し出す。

「うん。亜美ちゃんが、最後に君に宛てた手紙だよ」

「亜美が！？涼兄ちゃん、貸して！」

涼からひったくるように手紙を受け取った。そして手紙を読み進めて行くうちに、彼女の瞳から涙が零れだした。そして、最後には手紙を抱いて泣き崩れた。

「亜美！！何で！？何で死じゃったの！？ウワン！！！」

「亜美、大丈夫？」

「うん・・・」

「ごめんね亜美ちゃん」

「兄ちゃんのせいじゃないよ・・・兄ちゃん、亜美の仇をとってくれてありがとう」

「そうだよ。涼君が気にやむことじゃないわ」

「はい」

と、そこへ新たな報告が入る。

「艦長「まきなみ」からもボートが来ます！」

「まきなみ」からやってきたゴムボートが接舷すると、これまた涼の見知った顔が2人乗り込んできた。

「やつほー、秋月君に桜井さん。久しぶり」

「うつうー！お久しぶりです！！」

やって来たのは艦長の尾崎と航海士の高槻やよいであつた。

「尾崎さんにやよいさん！？「まきなみ」に乗っていたんですか？」

「ええ、今は私が艦長で高槻さんが航海士よ。絵理は元気かしら？」

「絵理ちゃんなら今発令所にいます。それにしても、お2人が「まきなみ」に乗っているとは驚きです」

「私たちもビックリです！こんな所で涼くんや夢子ちゃんだけじゃなくて、春香さんや真美ちゃんとも会えるだなんて」

「真美もやよいに会えて嬉しいよ」

太平洋のど真ん中で知り合いに会えたことに、皆喜びを隠せない。

「ところで尾崎さん、あの煙は何ですか？味方艦がやられたんですか？」

夢子の問に、尾崎は笑顔で答える。

「大丈夫。こっちは「たかなみ」が中破したけど、航行に問題ないわ。あれは撃沈した敵の燃料が燃えているのよ」

「そうでしたか。良かった」

「それにしても、今回は皆大変だったわね、875号も沈められたし」

「伊織ちゃんも死んじゃったんですね？」

やよいが笑顔から一転して哀しい表情となる。彼女は伊織と親友であつた。

「うん。遺品を回収したから、後で見る？」

「はい。」

「875号の遺品と、捕虜は私たちが本土へ送還するわ。後で移送するから、頼むわよ」

尾崎の言葉に、夢子が驚きを隠さずに聞く。

「え！？私たちはどうなるんですか？」

「それについては、天海さんに言ってもらった方が早いわ」

尾崎は話のバトンを春香に渡した。

「涼君、それに夢子ちゃん。今回の戦いでわかったと思うけど、U結社の行動は未だに活発よ。けど最近彼らの行動範囲が北方にシフトしているのがわかったわ。昨日北極海で行動中のアメリカの砕氷艦「グレイシー」号が何者かに攻撃を受けたわ」

「それじゃあ、U結社の主力は北極に？」

「その可能性が高いの。それでアメリカ・カナダ・日本の三カ国連合で北極海のU結社を撃滅する作戦が建てられたわ。作戦名は冷凍作戦。私達の765号と涼君たちの876号はこれからアラスカのアメリカ軍基地に向かい、そこで補給を行ってカナダ・アメリカの潜水艦隊と合流して出撃する予定よ」

「ひええ、北極ですか。またスゴイところへ出撃ですね」

夢子が予想外の事態に驚きを隠せずに言った。

「そう言うわけで、875号の遺品と捕虜は私たちが預かるから」

「わかりました。すぐに移送の準備に入ります」

「よろしく頼むわ。それと、絵理に挨拶してきて良いかしら？」

「私も愛ちゃんに挨拶したいんだけど？」

「あ、真美も絵理りに挨拶しておきたいな」

3人の申し出に、涼は笑顔で応じた。

「どうぞ」

それからしばらくの間、旧交を温める人たちによって876号の中は賑やかであった。しかしながら、その時間は短かった。

「それじゃあ涼君、一緒にがんばろうね」

「期待してるよ」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

春香と真美の乗ったボートを涼は見送ると、次に875号の遺品と捕虜2名を乗せた尾崎たちのボートを見送る。

「それじゃあ秋月君、絵理のこと頼むわよ」

「うっうー！元気に帰ってきてくださいね！」

「はい！そちらも気をつけて」

「秋月涼。お世話になりました。また会える日を楽しみにしています」

捕虜になった貴音も、涼との別れを惜しむようだった。

「貴音さん・・・はい！何時かまた会いましょう」

2人の挨拶が終わると、ボートは876号から離れた。

「行っちゃったわね」

「うん」

「それにしても北極が、寒そうね」

「けど、僕たちは行かなきゃいけないんだ・・・夢子ちゃん、苦しいことが続くと思うけど、よろしく頼むね」

「当たり前よ。こっちこそ、頼りにしているわ」

「ありがとう・・・ようし、じゃあ行こうか。絵里ちゃん、アラスカの基地までの最短針路を出して！」

「了解？」

「愛ちゃん、機関始動！」

「了解です！涼さん！」

「876号発進！！」

艦首を北に、涼たちを乗せた876号は走り始めた。この先彼らをどのような運命が待ち受けているのか・・・それを知る者は誰もいない。

戦いの果てに（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8576s/>

サブマリン 876

2011年9月30日19時53分発行